09　外国人も幸せに過ごせるまちに（外国人）

（ナレーター）皆さん、いかがお過ごしですか。福岡市がお送りする「こころのオルゴール」の時間です。今日は私、髙木悠未がお届けします。今日のタイトルは「外国人も幸せに過ごせるまちに」です。

ネパール出身のタパ・アルジュンさんは、２０１０年に語学留学生として日本にやって来ました。７カ国語を話せる強みを生かして、現在は福岡記念病院で主に外国人患者をサポートする仕事をしています。中国やネパールをはじめ患者の国籍はさまざまで、診察の通訳、他の医療機関や家族との連携、費用に関することまで、担当する業務は多岐にわたります。

【タパさん役】私が病院に就職したのは、言葉や文化の違いが壁となって生活に必要なサービスを受けられない外国人がいることを知り、支えになりたいと考えたからです。私も日本に来てしばらくは、仕事や家を探すのに苦労しました。さらに、異国の地で病気になるのはとても不安だろうと思います。

（ナレーター）病院に来る外国人は、福岡で暮らす人だけではなく観光客もいます。帰国する日に合わせて迅速な対応が求められるため、手続きや調整に力を尽くします。業務では

他の外国人職員、日本人職員との連携も大切で、タパさんはリーダー的な役割を担っています。

【タパさん役】人の命に関わる仕事なので、患者さんとも職員ともしっかりコミュニケーションを取ることが大事です。また、病気と共に心のケアもできるよう、アットホームな雰囲気を心がけ、職員が一丸となって患者さんに寄り添っています。笑顔で退院されることが何よりの喜びですし、私自身、この病院で働く機会をもらえたことに感謝しています。

（ナレーター）病気やケガで不安を抱える外国人患者のことをいつも一番に考え、今の仕事を使命として忙しい日々を送るタパさん。普段は流ちょうな博多弁で、病院の職員とも気さくに交流しています。

【タパさん役】職場で話していると、「あれ、タパさんって日本人やなかったっけ？」と言われて笑い合います。お互いに気兼ねなく冗談も言えて、フラットに受け入れられていると感じるのが本当にうれしいです。

私が願うのは、外国人、日本人の垣根なく、誰もが一人の人間として尊重されることです。そうすれば外国人も安心して幸せに過ごせる、みんなに優しいまちになっていくのではないでしょうか。

（本文９１２字）